

令和3年度 第60回記念米子市美術展覧会（市展）
部門別審査講評 及び 市展賞・第60回記念特別賞作品講評

【洋画】

審査講評：

コロナ禍の中、出品数も気になるころであったが、一昨年より6点多い57点の出品があった。ベテランの他、若い出品者も増えたのも喜ばしい事である。市展賞は、全員の見方が一致して、難なく決まった。奨励賞ではずいぶん難航して、入賞しなかった作品にもレベルの高い作品が多かった。

（評者：光木 桂二）

市展賞：平岡 遵子《ペルー ラ・ラヤ峠》

画面の右側に左側を向く人物立像、バックにはアンデス高原、人物と自然を組み合わせた安定した構図であった。欲を言えば、人物の右側の物の鮮やかさに合わせて、人物をもう少ししっかり描いたら、もっと空気が感じられたと思う。

（評者：光木 桂二）

市展賞：倉敷 卓《城山 木蔭道の中を》

城山の木漏れ日を歩く老夫婦の後姿に、穏やかな時間が感じられる。白い光、黒い影の対比のバランスが画面を引き立てている。小品の水彩画であるが、魅力が有る作品であった。

（評者：光木 桂二）

第60回記念特別賞：玉井 詞・黒見由美子《万葉の華》

教室の先生と生徒の共同制作だと思われる。気の遠くなりそうな数の点や丸の集合。作業をする二人の楽しい会話が聞こえてくるようである。圧倒する密度の楽しい作品に仕上げられている。

（評者：光木 桂二）

【日本画】

審査講評：

本年度も出品数が減り、日本画にもっと多くの方々に親しんでいただきたいの思いが一層深くなりました。一人一人が創作意図を明確に持って取り組んで、魅力に富む内容でありました。また、どの作品も丁寧に描かれていて好感をもてました。

（評者：西尾 克己）

市展賞：小川 聡子《なまししゃも》

まず目を引くのは優れた色調と大胆な構成です。確かなデッサンに裏打ちされた魚の写生、繊細に構築された画面に作者の力を感じます。黄土色をベースに7匹のししゃもの構図が不思議なリズムを生み出しています。

（評者：西尾 克己）

第60回記念特別賞：濱垣 秀峰《岩と波頭》

波の躍動感は素晴らしい表現になって画面全体のインパクトを高めています。力強さ、すがすがしさを感じられ生命力にあふれた作品です。

(評者：西尾 克己)

【書道】

審査講評：

今回の作品を概観するにジャンルが漢字、仮名、調和体、篆刻と幅広く展開されていて、理想的な結果としてよろこばしく受けとめています。書には「人のこころ」が入っていてこそ観るねうちが有り、出品する価値があると言われていています。市展賞3点には、その気韻が感じられます。

(評者：船原 濤軒)

市展賞：秋庭 華芳《柴門小雪経簷》

150字近くの多数字を自然な章法でまとめて中国宋代の書風を基調とした極めて格調と情感豊かな作品となりました。

(評者：船原 濤軒)

市展賞：大前 誠《南還道中》

木簡を基調にした作品。文字の大小、墨の潤濁に工夫が見られる。又ふくら味のある線と文字の中に程良い余白を持たせ、これに直線を織り交ぜることで、全体に温かさ緊張感を与える作品である。

(評者：森田 尾山)

市展賞：門脇 弘子《細雨》

明清の書風を基調とし、豊かな墨量と行の響き合いが心地よく感じられる作品となっている。

(評者：藤山 雅鳳)

第60回記念特別賞：原 碧翠《嵩山に帰る作》

今回特別に設けられた賞にふさわしい作品である。永年自分の求める線を追及・研鑽され、独自の作を造りつつある過程の作と思われる。さらなる高みを目指して励まれる事を期待します。

(評者：山田 龍香)

【写真】

審査講評：

自分のイメージを増幅したと思える写真が多く見られ、作者の感覚が伝わってくる。全体にベテランのようなしっかりした視線が感じられるが、タイトルはちょっと安易に思われるものもある。写すときの印象を大切にしたいと思う。

(評者：岩下 直行)

市展賞：谷田 晃一《群青と一杯の花》

組写真として二枚のカラー写真でまとめてあり、右側のガラスビンに生けた花とガラスの構図に物語りを感じさせるユニークな作品です。

(評者：石飛 忠昭)

市展賞：武本 宏文《猛犬注意》

犬の一瞬の動きを形良くとらえています。目の位置もフェンスと重なっていません。多少コントラストが強いですが、プリントの仕上がりも良いと思います。

(評者：岩崎 瑞枝)

第60回記念特別賞：八原 皓晃《波しぶき》

美しい色彩で幻想的な海の風景に仕上げている。荒々しくせまる波しぶきと二羽の鳥が舞う姿から音や動きも伝わってくる。

(評者：二宮 好子)

【工芸】

審査講評：

近年木彫レリーフ作品の出品が多くみられるようになり、この分野の愛好者の層の厚さを感じられる。半面この地域の伝統工芸である拵作品や染色・革工芸などに優れた技術を持つ作家が多数みうけられるだけに多種の分野からの出品が望まれる。

(評者：大谷 治)

市展賞：金澤 健志《野鯉》

木彫レリーフとしては、まれな角度からの表現で対象物をとらえており、立体感、表現の豊かさと相まって空間に飛び出してくるような迫力、また野生の鯉の持つ獰猛さなどを良く表現している。

(評者：大谷 治)

市展賞：岡田 友良《早春》

1枚の板から、透かし彫りで仕上げたと思われる木彫という分野よりも彫刻的な作品。細部の仕上げに多少気になるところはあるものの、奥行きを感じられる良い作品である。

(評者：大谷 治)

第60回記念特別賞：大井 節子《森の貴婦人》

今回のみ増設された特別賞に審査員全員一致で推された作品。どちらかといえば暗いイメージのあるフクロウというテーマを、作者なりの感性で華やかに表現。森の貴婦人という題名にも鑑賞者をうなずかせるものがある。

(評者：大谷 治)

【彫刻】

審査講評：

前回より出品点数、出品者数ともに増え、加えて素材も鉄やガラス、紙、テラコッタ、木など多岐にわたり、とても充実した内容となっている。しかし、作品が小さく迫力に欠ける点は、少々残念である。今回出品された方はもとより、より多くの方に彫刻部門へ出品していただきたい。

(評者：永江 靖幸)

市展賞：岡田 友良《夢想》

木を彫った抽象作品で、アンバランスの中のバランスを感じさせる秀作である。上へ上へと向かうエネルギーは、上方の月のような形へとつながっている。どっしりとしたボリューム感とやわらかく繊細な形の対比も美しい。

(評者：永江 靖幸)

第60回記念特別賞：小乾 沙織《実》

合板を使った彫刻で丁寧に削ることによって生み出された形は、やわらかく、やさしいフォルムをしている。斜めに設置された形も美しいのだが、小さくまとまっている感じがする。もっと大胆にのびのびと作られることを期待したい。

(評者：永江 靖幸)